

シティアクセス株式会社 バス車両火災対応訓練のレポート

2016年2月15日

バス事業部

タイトル 1)

お客様の安心、安全なバス旅行のために、本格的な消防訓練を実施

本文 1)



昨年末から各地で相次ぐバス火災のニュースを受け、シティアクセスでも不測の事態に備えた消防訓練を企画。

2016年1月15日、長野県軽井沢で発生したツアーバスから1か月。横浜市消防局・中消防署と連携し、「バス車両火災対応訓練」を実施しました。



今回のバス火災が発生した場合の初動措置、初期消火訓練は全国でも類をみない本格的なものということで大変注目をいただき、NHKや神奈川新聞、タウンニュース、貸切バスの達人など、各メディアが取材。訓練の様子は当日のNHK「首都圏ニュース 845」でも放送されました。

訓練の情報を聞きつけ、旅行代理店様や同業のバス会社様、神奈川県バス協会様、冠婚葬祭業者様などのお取引先の方々をはじめ、藤木グループ各社からも多数の方々が見学に来られました。

タイトル 2)

バス火災のほとんどはヒューマンエラー

本文 2)

まずはじめに、中消防署・予防課の中元さまより、バス車両火災の状況についての説明を受けました。



バス火災を起こすいちばんの原因は整備不良によるもの。ほとんどがエンジン付近からの出火だとおっしゃっていました。

2015年12月28日に池袋で起きた大型バス火災の原因は、電気システムのトラブルで古いバスだったためといわれていますが、新しいバスであっても、きちんと点検整備していなければバス火災は起きるそうです。

国土交通省でバス火災事故の状況をまとめたレポート（平成15年～18年）を見ても、古い

バスほど発生件数は多いものの、比較的新しいバスでも発生しており、きちんと点検整備されていれば防げた火災事故は相当数あったと報告されていました。

この他、電気系統の不具合やサイドブレーキを完全に戻さずに走ることで火災を起こすケースもありました。ショートなどの出火を予防するためにも、シガーライターを使って携帯電話などを充電する際は、席を離れない。離れる場合は、必ず取り外すようにアドバイスを受けました。

また、バス車内のシートや塗装などの内装は一度火が付くとあっという間に燃え広がり、消火が大変難しいという問題があります。

池袋のバス火災でも天井やバス車内はほとんどが燃えてしまい、鉄のフレームしか残っていなかったのはそういう理由です。

過去にいくつか火災事故はありますが、ほとんどの場合、乗客が怪我をしたり、死亡するケースはなく、乗務員の適切な避難誘導で事なきを得ているようです。

そういう意味で、今回の訓練は大変意義のあるものと考えています。

タイトル 3)

救命救急の実施が生存率を格段にアップさせる

本文 3)



最近では大型二種免許取得時に「応急救護講習」が必須になっています。119番通報しても救急隊の到着時間は全国平均で約8分かかるそうです。その間、救命処置を施した場合は命の助かる割合が倍になるといいます。

シティアクセスでも救命救急訓練は随時行っていますが、あらためてAEDの使い方と心臓マッサージの実施について講義を受けました。



社員を代表し、2人1組でAEDの装着と心臓マッサージを実施。声掛けし、意識レベルを確認後、応援を呼ぶところからスタート。119番手配、AED手配を呼び掛けます。



呼吸の有無を見て、止まっていると判断したら、心臓マッサージをすぐに開始。人工呼吸と交互に行います。

この際、胸の真ん中に手の付け根を当て、垂直な姿勢でリズムよく圧迫するのがポイント。
胸骨が骨折してしまったとしても、しっかり圧迫するようアドバイスを受けました。



タイトル 4)

実際にバスを使い、本番さながらの訓練を実施

本文 4)



次に本社前の駐車場で実際のバスを使った実地訓練を行いました。中消防署からは消防指揮車、消防車、救助工作車、救急車などの車両と消防署員の方々が来社。



走行中バス車両下から白煙が発生し、車内に充満したという想定のもと、バスを安全に停車させ、乗客を避難誘導します。

その後、乗務員による 119 番通報と初期消火を実施、消防隊が逃げ遅れた乗客の救助、消火活動を実施するという流れで行われました。



乗務員や来客、取材陣がバスの乗客に扮し、消防署員の方から煙についての説明を受けました。

バスがゆっくりと動き出すと、後方に設置した発煙装置から白い煙が上がります。



訓練とはいえながらも、白煙の勢いがものすごく、不安や緊張が走ります。



視界がほとんど聞かない中、運転手役の乗務員が乗客を避難誘導。



全員、無事バスを降りたタイミングで 119 番通報し、消火器での初期消火を実施。



消防署や救急車が到着し、自力で降りられない乗客の救護を開始します。



バス後方にある非常口から負傷者を担架で搬出。



続いてバスの消火活動訓練を行いました。



タイトル 5)

乗客の命を預かっていることを常に意識することを再確認

本文 5)

おりしもこの日は、軽井沢スキーツアーバス転落事故が起きた1月15日から1か月。訓練の前後に哀悼の意を表し、黙とうを行いました。



その後もバス火災や事故など、年末から大きな事故が相次いでいます。今回の研修はこれらの事故を「対岸の火事」とはせず、お客様の命を預かっていることを常に意識し、安全運行を行うことをあらためて社員全員で再確認することができました。

また、本格的な火災対応訓練にご協力してくださった横浜市消防局・中消防署の方々に感謝いたします。



予防課の中元さまより、バスのちょっとした変化を見逃さないようにアドバイスを受けました。

エンジンの音、匂い、ハンドルやブレーキの感触……。事故の前触れは必ずあります。

また、ドライバー自身の体調の変化も「気づき」が重要。いつもと少し違うことがあれば、早め早めに対処することが事故の予防につながります。

今回の貴重な体験を活かしつつ、バスの整備点検や運転手の健康管理など、日々の運行管理の大切さも社員全員で再確認することができました。



最後に藤木社長より「この訓練を教訓に、より安全に、『乗って良かった』のお言葉が頂けるよう頑張っていきましょう」と訓示をいただき、研修会は終了いたしました。